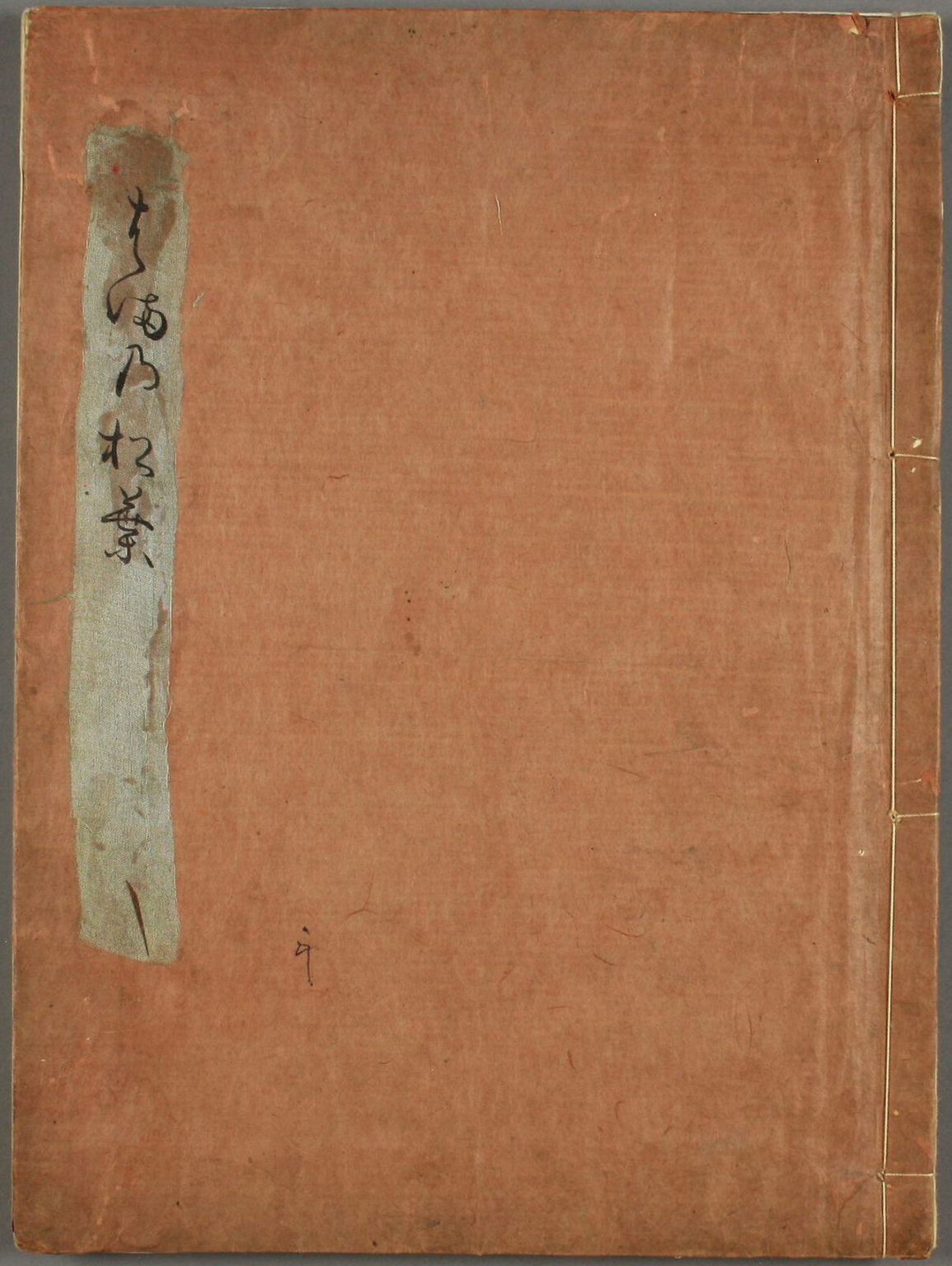

濱千鳥

御代乃名を天保十三年ゆくふるしの長月のふしぢ乃比日

伊勢宮さまより御そなへしまつよかの日よ行基の濱辺乃御苑に吾

宮御せうえうをなさせたまふ屋きよしゐまとゆきこし先しより後こゝ世

たまひて御詠

あもちどりよ吾君濱の袖乃上よ先くさの家の加ゝ御屋しとも

さて〳〵みゝの日にありめるよ冊ぢ隆はくゝ文たる空なかれぬ屋きさもし

みへぎ屋まやおほしめしやきたまひけむいにしへ乃日よせきをたまふ屋

きよし

大阪市立中央図書館

伊勢宮より千代乃きまろくの人さ世給ひしよ乃比

なかふり増りぬれどもやゝふたゝび御けしきありてとくめきこえさせ給
へりけるほどの御かどの御詠に

八重雲を掃ひ清くさん風もがな高天原のよろづ神々
と遊たましひをうれしとやうけむ清くひらむなぬかやうかの日まで空に
雲のなごりもなし殊さらぬかは日かなたにおもしろ清ふ庭きよし御けし
きあまりれど暁におきおきく宏波少進清眠庸望安藤雅楽職之小
山田外記典清なども おなせとも供養らく御供にまゐらまほしくする人々さら
持ちあへり櫻田遠江守直靖は濵の御花に侍る人々しるし代をまゐ
てまうでぬあさかの空に霧こめてよくのけしきに川々たれもいるにぞおもや

いひしろふなど卯の時ともすぐ頃にやうやう晴わたりて日かげもさやかに
さしいでたるは神も仏もおほづなびく今日のいでましをまもらせ給ふ
なるべし御詠

天雲をさら給ひも今ぞ晴わたりて朝日乃影をあふぐうれしさ

夜より御道ちかくの清くとをしとはまうでたるが今は御うらでせきを給ふ庭き
時なりぬとまうし清るまゝにせむしら事おぼえて御輿を奉る麹塵
乃御衣緋もむしろに八重菊の御文の大おでう行き紀色に空に
の御さしこ平なりて左右の御手には水晶の御念珠御うち不里
なと平そのしたまへり 角田修理俊徳 谷野主殿常彰 西村左京福重

三好正親長保淺江主水孝友海淦采女量友右衛門輿のえぐり
右まつうらまはりて真奈院の御宮をあゆせ給ふよ御さきあふ
壱きちやきこえめぐりゆくわざうるあるべし少進雅樂外記ハ
肩輿よのまへ御添まつうらる場上寺の山門をおさを給ひ濱
松町を北へ芝口町を東へあゆを給ひて濱の御苑のわりきの山橋を
ゆたり外廓の御かぐをいくを給ふよ少進雅樂外記き肩輿まあ
まへ御供よ従ひまる中の重の御うぐを高き内の重の御門まて
御輿よりあゆさせ給ふわど道の左右よりハ矢いきるきぞ〳〵の官人
たちいとおかうるべし藤づのまつ原る廊の橋を渡給ふとて御添

十年まてかゝる御沈よ流めぐ舞おもけうぶ春の蔭なゝ
池の中洲の御言よいくを給ふよ信濃はまつ原の侍従幸貫朝臣近江
乃三上の遠藤但州氏統朝臣新見伊而正路朝臣おゝ国ゑたまひて
榊宮さまに御所ゆこゝろるゆあるせざくも御人ゆ御まふあるべし押路言
きりゝる標榜をかけゝまなるを御所むしゝて
池近く狩ゝ路乃きつるきいふるゆ西まて御代はためゝゆうる
御うゝた
澹日微風水檻明
秋晴光景似春晴
沙禽也意恩波暖
憂々鹿鳴雲有声

巾見やりたるを

立ちくゝ巾花の枝乃木の雪ふりわたる帆けを彩端まぎれ家

滿苑風光總不凡　青松如蓋覆仙巖

誰知咫尺是雲海　檐角忽明雙白帆

巾床ゆゑあやしれむうひさくの香爐ゑ空焼のりふ〻立のぐ〻元もいまだ

こゝをみちぬまゝ富士さしまうの前絵ちなるぶむだいゑ硯なおれぐし

巾沢ゑ玉菊の乃墨に硯なくしふひろぶゝゑほうたんうくさを添たる

ふむでたく亀形の銅乃文鎮けふさむひとむひ唐刷乃ゑ滴きう

したゝふさくゝぐをのきゝれたりまゝ雲拂硯凡硯青磁の水純なき

巾きたまひぬまづ薫茶をまるをりうづゑ暮蕨羮やうれ元もいまゑ神

ゑうしぐも巾茶のこ乃料ゑそうてまゝくまゝ分少進遠江雅楽外記ゆも

おゐどき薫茶たりうづゑのなつぶ成將圖書頭司直朝臣將野晴川院養

信法ゑ下まみ乃年ゝぬ氣統朝臣　挿管さ乃の仰の旨をうゝし

あゝくまゝたてまつる法ふゑのおふうぶゝまゝ和歌の巾題をそゝを

たまひ今の年ゝはゝまつれ歌ゑもうまゝ紀ゑよみくなる

べきゝし巾ゝしきくのむ年をおゐせのゝゝゑ年巣雙千秋月前管

絃池水久澄の三題なゝ祝の巾盞とやゝもにとゝゝをたまゝびもとめ乃

巾題の心乃巾詠を

けふとゝせし菓の枝を千年の秋をくみく数ふ舞

西園寺朝臣の奉られし歌

なゝそちよぬるふのむしろ仮ふなつさひく濱のゝ松めはるかしこれ

たりうゝ酔をきゝもる花むしろふさくめる菓のさかゝく

きゝうゝた

海門秋色瑞光融　僊駕遠臨濱苑中

佳節幸陪文酒宴　叨恩近接

大王風

清晨邀駕値重陽　氷樹添輝勝景長

何用登高尋故例　陶然勸酔菊花觴

三条直朝臣

濱苑雨歇正重陽　迎接香爐池上

堂海色遥浮龍象袖　山客近映菊花觴

一宗粉徳帰盟主　千古高風属

法王吾亦三生縁　不浅陪歓幸仰白毫光

ふしをゝ竹の竹芝のうゝれ涙ゝにこえたるふのゝるそな

うしこさゝ浦の濱ゆふ称こし身の年波もゝ長もつるかゝ

誠之

何幸陪遊入御園
十分秋霽似春暄
松梢白鶴呼千歳
也認羨平挾纊恩
狎鷗亭上玉欄前
碧水如藍雪羽妍
一行風光更幽絶
紫藤橋畔夕陽天

狩園乃中をみやきのゐんとも称してあり立をもふ正路朝臣司直朝臣
義信法印信俊一まり本村文助喜庵所先よりはるばるまく草葉
の家を拂ふなるべし西の方なる橋を見たるをたまひし景山よのわらを
たまひて所詠

海山の色もひさつるみるとしも世よたらひるきはをのふ乃秋

所むま傳をるこ川を見たまひ志んせむ度といふ不なりちひさき池よ
かよはたるこの咲みて家ハ四季咲てふひとくきるる爲しもくりふる
さるこの物はくりあふしたる中加賀芋さるまてぬぶ大なるとう
くとの乃はるのまひ度ざりていう免しきうなりたるあるハ山茱萸山査子
あど赤き実乃多くむまひたるとも免ほどうるこ鳥たまこの池乃
わとうのあづまやうこ見おろをば水の色青くさづまりて浪もたるぞと
ひまかりさるべくもいうぶいとそのまこご紀さはるこみくにるれを参考略るど
数多なれつどつるよしふさしそおハしして所詠

磐奢鴨乃なるらも君がうはくしみつまの乃ふためしるらん

所うつさの道乃わぶく菊園の菊いまふくるまくあるに今乃たゑとて咲

めるうを枝しうるさを折るひとまちよ千代を数へて色まさるひ

うはをるぬめでたき観音堂の霊像を慈賢大師の所作なりと世

堂よかり免くらせる絵馬扁額あぶいつまも狩野の名人のふでの

ひとくもなり所詠

山深くいるさちしてふだら人の物の影さへ作くたふとき

世とりえるうさはよそはかりもだ潮足山てふ山ひう芝生よ松おく

生立たるさはえ入もいとくに與清

戈を止免底まで国を君代の御代よふ濱乃方川乃響

まく

君乃代をかきりも涙せうちよせくるあるうをたを東の松風

海をへつつて右乃方よ博乃の山門本堂まもそはを殿をまが近うる

花のうくの御やうを安房うみはふさなぶじの山くおとを人のまよびきも

いひはをぶきさはまくく八重のさを砂のうをりをぶくもるし所詠

うだの京うををまうくふまを足濱をハ唐土までやしゆくをむ

ちさを波毛ヤん山三保が岡おぶ絵くく富士乃山ヤのわ　西海山乃

もあくうう箱根おうもむ西のもるかゑみるくさんしうふ富士の嶺のミ

雲にかくれる遠い山嶺がかくれもしてのきもぎりや濱辺は霞はじめ
て茵山なたの方よりづゝ世うまして沈のわたりを北ざまふおもしまるそば
濱やゝ濱りまきまるおもを引ゝ〳〵ていきよりにそのきるえとき代ろ海
土まるゝ〳〵などいとゝむ庭りやりゝ変ものゝ竜のりゝ立のゞれるあと連
さたとゝむるゝ〳〵つゝまるゝむとゝもいきゝはしさゝまゝ調しあゝる五色
の濱ひゝきおりゝゝづまるゝせたまひ御供よりゝまゝれるゝ少進以下乃家も
例柳の水濱一杉樋づゝ濱りゝぬ濱竜のさゝを御後して御俳

五神のきるゝゝまで立よりゝくあゝの苔屋よりゝもめづし
海まの御亭まゝきほしいこゝせるふゝの御屋ゝそ冨士を前ゝる文参

ゝ硯を重奥しゝ慶蓋ゝ詩義たゝ冊をのせゝ晴怜形ゝ文様をえれ
たり御俳

みるゝうちゝ行ゝゝふ舟を数やひゝくゝ八重のきわゝの跡りそゝれば

典清がえれる

まるゝひあるゝやゝうぼ潜ふくゝえゝるゝぐや深き恵みの海の濱辺ふ
秋のさまゝおゝるむゝうゝ久しゝみのたゞひおきをおゝひよせくさゝ仮ざゝしを
のゝたゝ紅葉しゝさゝうゝとゝ紅葉れゝしきバを染あゝるを入て正路朝臣

時節
ゝりゝふまゝ御世のゝ秋の初紅葉君待ゝるてや家もそめゝむ

再ゝゝの御詠亭ゝいでまゝゝて人ゝまゝゝやまゝのゝの葉ゝもをまゝじめ

まふ正路朝臣

海苑妍清駐法輪（かいゑんけんせいとむるほうりんを）　萸嚢菊盞祝佳辰（ゆのうきくさんしゆくかしんを）

田頭應動思郷念（でんとうまさにうごかすべしおもふきやうのねん）　花頂山邊秋色新（くわてうさんへんしうしよくあらたなり）

思ひおくいつかはきみん海ちかき御苑に刈し今日のみるめそ

直靖

今日といへバ十年の菊に数そへて万代かけよきのふ乃露　園生

かかりしもかれうへ恵みのかげといへそ千年にあまるあせる菊の千歳

御饗膳まゐるわど少進陪膳に候じ修理主税等い千長を役すかく申し方

まて竹田伊豆守敷地朝臣伊奈遠江守忠吉朝臣、永井佐渡守直正朝臣

岡村彌右衛門直史臼井蕃房輝などなまめきたるをおこなひて

役送の人々にも古文おかきぞくるべくしまいらせて後養信法印御

前にて筆を染られくる菊の花をえがき給へるなどもいひしと

おたまえ目おどろかるるはかりなるふじ池のみきはなる松の梢に

霧乃ひとつゆくまれるさまいとでやおかしきごとかられバ法印も

おほきに感えもいはばいとでおかしと御歌かきましけれバ正路朝臣のやく

のしきまゐる

聲高く君が千代よばふる松の梢にたてる鶴しおもぞ

と遊ばしたる御墨跡なる御筆のあやにたとへんものもなしや御茶和乃

うんじゝ京極黄門の藏人よおくふかしせうそくをよまて奥に

住吉社松の根あらふかき波よ初るゆゝしき千代もかゝらし

とゝふ歌あり是も後撰集の神祇の部よ載く事書よ住吉の社う

うたふ所をそゝめおの歌を神を経国ゝまも世偉くるふとゝみ四方風雲

よかゝまほ妙門霊の釜乃湯のわきくるを松代波のおとゝもきこゆくふれ

くいと免でたし砂張の水指柚子形の香合古清水の盆梨子地の茶

茶入黒塗の棗ゝまゝなる天目ハ建盞ゝとゝ高名の器のうゑ

を撰らゝのくられたり堆朱の六角ゝらし盆よかゝらだゝそのゆゝそまく所ゝ

まゝやゝく茶道のもゝ也鈴木林頂茶亭さんちやをゝのしてゝ

茶碗ゝ三洛ゝ三種の名物をゝ乞ハをたまひて所後するよ茶入ゝ秋野

文琳ゝ袋ゝ行なゝんゝうゝひ得にゝゝぬ茶杓ハ紹鷗ゝ作ゝ筒

ゝひゝ末の半ゝゝ所敢よのふをあふゝ吹上の所池の山科ゝを

今のゆまゝけよ所まゝのゝもゝぶゝ花ひあゝ龍の口よゝゝ水ゝう

かゝくゝゝまゝ引ゝゝるなゝゝ松ゝもゝまのまゝゝまゝ久代ゝ迎ゝて

不ゝあふゝさゝてくゝゝうけ中の間よ錦を敷て所座ゝ所ゝゝ舳の方

乃えゝきゝ不ゝまゝなゝよゝるゝん為ゝゝるゝ上よ召人ゝまゝゝれゝまゝる安清東儀

季蕃大神山井景冨ゝ秦東儀のゝ入風日常城おゝゝふ伶人等衣

冠を為人楽器ゝ調人合せゝかゝくゝゝ待ゝ生なゝゝ舳の方の

えもの百はだんぢゝせむをたきそのゝ　正路朝臣　司直朝臣　養信

法印庸望　直靖　誠之　典清

てゝはゝとゝ蘇合れ急を奏し給ふ宮さうのそよあそび

直靖　誠之　はやゝのふえ　風は琵琶　景憲は横笛　常城は琴

季蕃　大鼓をたゝきまつる　宮重のふえを吹せなまし

えもゝ管絃うるはしつゝまはる越天楽れこう楽はさうの琴は

あはれなる蘇莫者　千秋楽　五曲のわゝ宮の内詩歌　人ゝの

いと多うゝ御宿

魚竹は濱の松風　ゝの仙ゝみゆく舟うらびも

ゝゝうゝ

ゝのゝの松風心すゝは君ゝは歌しゝ宮人いとなん

玉鏡波平罨画舟　鸞絲鳳管奏千秋

此声顔送重城去　解散台階風夜憂

正路朝臣

嘗聞大堰泛三舟　今日絃歌継舊遊

錦鷁軽飛池水濶　銀鱗頻躍海園秋

糸竹もおりふ松の琴きゝよる仰ぬりふの舟遊び

司直朝臣

琴笛の音しきみ月たる池のよやうゆゑ月ぎさしそふ

かしとくもふきゝ君がはまごとハ東の新世のものこおもハゞ

養信法師

志れ名やよ世ゑ一たび四ツ〻ふ今日の御舟の糸竹のこゑ

かゝこゝ君ぞ御舟にのゝはまて仰も言き糸竹の声

庸堅

糸竹のふゝてゝんゝくふぞきゝたくひもなきよもゞ〻ゝを

滅之

瑤池波穏彩舟軽　簫笛奏来和玉箏

一曲千秋楽纔閑　又聞禊謌掉歌声

興清

御ふねしの御舟ハ今ハさふらひて心の妻ゝもうしかゝゝ

ゑの〻音ゝきゝやめつゝん鳥きゝ〻ゆうたゝ〻みの波よおゝて

今ハゝゝしたまゝる御楽器笙ゝ朝陽凡雲乾凡麒麟凡楽波接簫

童陽凡篳篥ゝ千鳥凡箏ハ吉野琵琶ハ天壽凡などきこえなる中ゝ

楽波とゝ〻るゝ中ゝのふえハ今ゝ十年ゝまゝのむゝ　宮内卿雅

のたゑゝ場上寺ゝゝだゝゝゝゝまゝゝゝゝ直清まぐ〻呪のわゞ桃凡ゝゝや

ぼゝゝまゝゝゝゝ御簾中の宮乃都ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝを

たまふ屋よりしうらの所にきけるて　宮よりまゐらせたまへるの
ゝ其後　宮　西城よりまゐりでたまへるおり　桃丸とゆとりもよりうまの
りぬあるよふれさをあしく　宮の御笛箏のことなど遊ましゝる桃丸も
さの笙のふえはゝまつゞまよりしやむるなきおりをる御夢りて御詞
きたゞひまれいるるまゝものさいはひあるうん都より帰りて後無筆
なほけたまるらまゝこひ筋をなるるそだしあゝさせまいぐそとの
めしまおりまし

御簾中の宮の御諱よりかゝる奥波てふ鍔を遊だして御歌をさゝ添へなま
らるかしもそとあるややゞてそとの黒漆のうしろる浪の月乃
給して今よ直靖うひとつ多よふいるを宝とつき捧げくひ免そなる
あゝ〳〵西路朝臣所より仰ゆて

けゞ波よりもゆゞの月のさしそひて御舟をゝけき糸行乃琴

舟子等ゝ舟うきうまるしきうしきうにいるに西路朝臣仰を伝へそ
よるさゝまるふゝとつい御代ゆいまゝもとつい宝舟とゝよ唱をうちうけて声
おゝしくうたひたまうう御詠

御代かとさとわきうとよ琴をもゝはまぬ宝の舟の舟うゝ

重陽の節ちれいとゝ栗の形餅ひやうの時よ合たるものどもしくまゝうを
陪〳〵ふ船の中の御屋よりの御心ちあきるゝべし船より下りさせまひく再富士

凡山より峯をたまくだる石雲よりこれてさだらちぶきうけ見ハ所詠

心うての山ハやしうこえるちかと ゆふ日さんてまろふ白雲

きさいじまうたりの磯道はくひよ波の所亭よりおはしまして志ばし沖の方

なんきよくしに絵ゆるや月波のうへよ照まてさなぐふさ多をさきみ

てたぐむげでくしに所詠

きづ〻か海原遠くうちくる波の光も月よりあるひく

まく所うふくし

高亭面海望逾奇　吟到落霞紅盡時

忽見暮波揺素月　氷晶毬滚碧琉璃

正路朝臣

氷鏡開来海面輝　潮風稍々透噎衣

金波萬頃明如畫　照看雲帆掛月飛

夜もなわ帆ら手みえて陰も月まこ多波よ玉竹芝の浦

誠之

菊呈佳色笑重陽　不是尋常一様黄

豈料斉門濫吹客　優恩酌得萬年觴

海波閃濫夕陽収　已見天邊顥氣流

幾點帰帆桂明月　一片清光萬里秋

おもわぬを爰うとばるるものの日をゐ園のかげよ立ちぶし侍

興清

とこよ流し北なるこのこう月うげよこまの波のうるの海ふ

けゝ神代の伊勢乃宮ともいひ侍るき所のさまなり所花は生るかき人の

なせるゞ如くおほくうえうもの葉ふたひらかよちげう侍やめきよ和の杉よ

八仙さ紅よりし西海朝長かうたまひうるよ笑侍しく扱さ出うるきく

ふさうる　所称号の文字ふううひてかくとれはうきとよ所代まなる

こんなるひのさうしおもうぶうもるこ和ふとたふとくもめてうしもかん

しまるいまうふ

興清

君う代のたゑしの杉乃平うもぶ侍とれの枝の先ごたき

さうまておわみきまる重人くうもたまそうぬ　柿宮さまよう所瓶子

提重おまうづものおわしまゝぶせたまくる中もさ見たこのつ乃杉形

うづをいうを巻の花形よものしを和れを三重かさ孫たまくるふの

重九の所心しらひるる侍しう中ふさううのごもくいひのさなこさるる

をいううげてうしまうれたるそ乃月もあやなれ所さ見れそのあり

和れ菊よ菜萸の作り花をさくさせたまくるな爰いうう所いたをふれ

所心おれてあうげる　宮の所うぶごこう歌

九しな童ゆ保朝の子りにあやに菓の枝さゝげたるかしこさ
正路朝臣司直朝臣養信法印斯復朝臣忠吉朝臣なとよみてたまふ
とて御駒ひきそもしやむことなき御方の御駒たまはることは
後花園院天皇の御代の天酌にあつかりくまれしためしときこえ侍るをたま
はるをすぐめありしなるを今これにならむ御亭山に成らせたまふに御亭
のうし侍にえもいはぬ松あり山田の畔はなひの道をおもしまさに我しも收色
はまて豊年のさましえたる田の面に鳴子ひきたへつきなきいとたかく事
なるさまれるやかれ田の面にはおどろかしに鳴子ひきならしあまた
案山子ならひ鳴子も引板も歌によみてあるしそのなかに切竹をて法人事
と板をてはへきこゆるけぢめもなるべしこれわびしきさまをものうしやく
や思ふらむ中にも水車などのさまふをめしても流しかけたる谷の
のまうけをたる器に満てしまらく久しくへるかり縄のおのばらをきれく音
たつるやうにたくみなせるもいうなるにつけてもそのまゝえもいことをもいひ歌に山田
なる僧都とよみかはらむに案山子と見えたるはされなりかゞしとそ五十六
百年前の書にはる夜の鍋のかしらやいぐしを焼かせかき書たるに
よれはかくせかかけもしてかゞしとはいへるなりこれ古きさまなり糖さく
もやうのものなくにも鳥けぐさのかゞせておどろかすものもあるそのなかに
なる張案山子乃立と思ふ人も行るを行やまりなき道のかたのうちへ

田舎びたるのきてふ大木立てり織殿おもしまはすて綾衣あど織
おりそのごとし織手共作桃文原等がおりいとあめるさ間めはくかく
所流ときとうとたまふまくおりまうたるともむにやうの光むう
なりもむいとおりふある箱をのまして糸くを踏くり所詠

たくみうもたりあやなをるきぬくを都まくる錦まさきむ

正路朝臣たりをのむま仙伯くく廣望直請與清るも所濱織の緒二つ
むぶぢくたまくをもらハたふとしともかしこしともまうしのへん言葉
さくこくくくのから衣たもとをぢ化ゑまいうをもむ與清

いまくくのうをを伯くくくれもどうあや織なま綾衣うか

藥圃梅林なくのうとうを絵くく杯の所亭まなくを踏ふうど池のおもう
こちま籌あまくかたきこかくこまをうろ八次とるくくく列旅なるまるもも
はをうてくこうぐやうきまて賢右衛所亭の庶まを高相郷の古今集を
おくせたまくるれ詠愛ふもでのうとくみをもくくめてさせ踏ふとかきうし
祝箱をくくたまさくなとくおきぐくし大を孫うの花瓶まを尾花まんぐう
などさくれたるいとと與あくきやまむのきくこの玉の所瓶まおれくく玉の所盃まを
て名酒をまくを踏ふ所者まて菓の部あくるまくく所詠

いと深き色ぐなるさけぞ酒てくる玉の杯とるまを法者ても

もくこうひをまるる人くくも瀬戸をのまさ間くの歌論くなる杯まて名をたぐ

拍をきゝたまへるに各心まゝに色あるを見るにつゞき正路朝臣おつを
伴くらべまくふ興情も筆の花のうゑ筋たゝかたうむぞうく

君ら代の八千代うさかゝく仮てゆゝ歯をのみ行人の置

うゝぶきの御亭ハ田家のさまを作りあゝ晨耕の具どもまうけおせたまひ
圍炉裏の自在に鑵子をかけ屋もたるいとおかしとのこゝさむぶきに川とも
なゝひげ籠にこゑ色ゝ咲たまへるこゝハゆゝしまつをたまふ人ゝ
遍照院の秋のゝ色みなぶいひもむよおもはゝあたまへるや御徒

こゝ山ゝ袖のきたにより鶯まこめゝ野山のさのこゝ花とよさむ

遊慈亭の御庭に来人范安仁ら筆れ亀に蓮のうゑの御庭画をかけさをるひ

南京の吉深行の六角の蓋の獅子の香爐をおせたまへり上乃棚に枝珊瑚
珠の長物ゝ下の棚に雪窟乃蒔絵の机の上に志紀まの獅子
長物ゝこゝハ中ゝ見給ふ此外ふまるを給へるゝ
ものかゝ人ゝ花ゝ色ゝ中洲の御亭ふうゝをたまへるなる
くれの御あるゝじゝもたゝ筆ものゝ花ゝ
柳営さまゝ今朝たまへる御題の月前の管絃を　宮

ゝも月に舟ゝうゝ夕波のゝぐゝ通ゝ糸竹の琴

おなゝじ心の御ゝゝ

珠樹玲瓏夜色妍　　伶官盡是月中仙

洋々奏到太平楽　仰祝傳声萬億年

池水久澄枝

曇りなき池の鏡ようけしもむすぬ君が千代の御うつを

伊賀守正路

菊愛千秋

けふうゑし惠の家より咲菊の花も千年の秋愛むも

圖書頭司直

君と君とうれつとひつさく菊の花も愛むも数千代の秋

法印養信

来遠き千年の秋の愛おバたるかよもふ家の白菊

臼井房輝

うれしとや菊もたのしてまろふん数せうぬ君がかんげを

鈴木茶重

千代うけて君ときもむ愛なるか来に長月よにほふ白菊

法眼庸堅

下ろ枝ほても蓬のふ菊乃御そのよ千代をなれくめでまし

遠江守直清

毋君の御代も月と咲きそ千年乃秋のため愛く舞

安藤誠之

千代の秋ふちぎりてくる菊の花ふ頼ひちき色者ちらさ

小山田與清

君が代乃千代の為代もきぶ菊を秋てふ秋ゆかぬ栄ゆん

正路

月前管絃

沖ゆく舟もおきて船ゆ月ゆ澄ゆ糸竹乃音

司直

秋風もふきてハいとゞ糸竹のきぶくきこゆ月の檻

養信

糸竹ゆ琴乃きぶくを空ゆきゝ月の都乃人やあらむ

房輝

糸竹乃きぶくゝとゝもふきこゆる今宵の月ゆうつるまきめや

茶亭

引くく半ゆ月乃ひをさへ冴ゆきめる糸竹乃琴

庸堅

糸竹の音もあわせゆに澄ゆる月の今宵ハうつゆ

道靖

きぶゆれバ月ゆ色さへ冴ひまぬ空ゆやうふ糸竹の琴

誠之

糸竹のちぐさも月のあらるゝや秋のゝ空ちまみのぐどん

與靖

たゝひちる糸竹乃音も大空の月もはらやもみうたぐん

正路

池水久澄

もゝうあき君ゝ十年の影うたすす池のかゝゝ塵くもらじ

司直

岩ゝ根の常盤うゑはよ苔むして歳せもむ色き庭の池乃

房輝

やゝしゝちよみぎハ乃杉のけうたを池の鏡ハる塵もなし

うゝさゝためしはきをびもゝゝ千年ゝゝん池のさゞ波

茶重

千代もちむ色ゝ乃ゝ池ゝるゝ乃ゝ乃杉乃影ハうたりて

庸堅

軒近き杉の梢ゝふゝ風も池乃ゝとゝもるもむゝ舞

道靖

萬代もちむゝ亀の池ゝふゝるゝ岩の千代の杉ゝ

誠之

與清

むべ〳〵こゝ地の心もさすみぬめぬ地めるとゝぬ所代の所きゝ例(たゝ)
夜やう〳〵ふ屋まゝに今さはゝとゝの鐘としうち見ぬぶむ事はふまも
さる人〳〵もいうよ所ふ〳〵おもひとゝふむの所〳〵らひとゝ所〳〵さをいせ
をたまし初代の侍従徳統朝臣正路朝臣などに所たん免ふまて
柿嘗さまの今日の所をてゝ〳〵山とゝすく浦と深き所ふはく〳〵この厚あきし
をのべきこゝゝゝし司直朝臣いし〳〵よ所ふかをを告おとし〳〵まして
うゝゝゝあき演のまさごをうゝふてもゝふの恵みいうはををん
とゝく所興まのゝをたまひぬ武田侍従信典朝臣下野宮津宮の日川忠温朝臣
なとゝゝ今日の所徳嘗代司を所ておとし〳〵まし〳〵よ所對面ふ收ふて
庸堅〳〵て所ゝご所ふ中のゝくさせ徳ゝふ所とゝゝばあゝゝ〳〵今日お進遠坂
ゝ下の山代の今ゝ八景山の北方の所も百場ふ世ひな舎の内ふもゝ〳〵ふを
ゝけ鳥味の所饗膳おゝゝみを徳ひとゝふ世ひとゝふ〳〵意深者などゝ
おゝきれ孫二事呂ゝゝをて〳〵しゝいれゝゝふなを世たゝきさてゝもの乃ふ
還所ゝゝを徳ひ少進法服雅乎外記も所ゝふよはふまはゝて所ゝ宮
ゝゝはをたまゝゝは世ひゝつをゝゝゝ所徳
うたゝつ花いひつき家ふ侍ゝゝも所代長月のゝふのゝゝひ柳
真豪院の典應上人安立化の若教上人學若和尚澤家和尚宗園

法作小山三河高麗茂一所なるまちはけもりて矢ごろ還所ろぐを
修くるをこゝろぎなる遠江守を所師の事どもこれふれおとろひく
遊はぎてうくりてきぬ十日の朝うく密賢大僧のもまうのぐりたまひ
宮の所めぐりぐそゝしもさぐるう宗門の栄耀あめしくうく乃ぢむる
なるよりこれよまさるあきゝ隨毒のあんだよ緋の衣の油をうるわし
たまあるもたふゝきゝ所心ろうや
宮所みぢうの所記をめでたう遊だして　おろやりさまゝ奉まひ
さまやうるゆとるは無清ふはうまれてあろせこうまびあぢんたる
杯のさくいろよ庭のおち葉うきはぬて奉まるそいともかしこうぐ

ろぐうよこゝ

沈む月も沈まぬ亀のまれまかくふむでの池のさまうまふれ

右一巻　天保壬寅重九奉従
華頂大王　所駕於芝濱所園兼
叡命所録也

臣小山田外記平與清謹識

天保十三年の九月はかり小山田与清かもとし東れ家須の御選の
記を御らんじめでさきたまひくちはの松葉とうハふミまつよよしおふを
ことうりそハ大宰大武高遠かきゆする須の松葉ちと年を経く
ありしちうふ風にこそまてとハへる歌にちなせ経ぐるある金しにあ
かしこ

臣安藤雅楽誠之

天保十四卯の九月二日

勅使として高野山へ参向あらせられ徳大寺日野殿元文の時

たまひしにより宿田川を通過せらるるに詠ぜらるる

徳大寺大納言実賢公

世々の雲も絶えぬ海原田川に船のあとをとはるるに

日野前大納言資愛公

墨田川恵みの波のかぎりまでは若草のなびくいつ海ぞ

秋の神しるべさしそへ我をかくるる

やまとくにしるべし

色ことに幾世うつろふむら百草乃盛久しき長月のあき

ちくさある雅うの世よ移和て咲やさ桜の秋の色艸

山船のうちにくるに伝うす

法印李舟

魚田川むらをうけてよる波のうとあきれもあとハ有うら

多ふの山舟も麒麟九しゝ石つけられたり

山舟きに波の深きもむぶゝよ時ゝ閑亭乃芦代乱き葉

都鳥きゝつくとのたまるにきれど

都人まゝまゝにうゝや舞川の名もやさしきこゝろふれぬ流

あ郷を奉る

都名渦田川京の海名むりにくる波乃通路

こゝふまゝ榊樹の春行きやうゝ葉の花の秋き色艸

○

濱乃山藺をたゞ覗しまゝて

菊大侍郎史勝

和田の原むらふ波路の東後く空ようききゝ海士の釣舟

[illegible]子と勢の信やまむ池のえろきあよ狩ちくあむ
類なきかくる恵のかしまそれ仰くもまき秋の空

前きあれしく

摧大伝正光朝

お行命る家の生業の唐よりき世のわたる所蔭生の秋
秋風きぬくしもなく名清き所や絡ふ与ふるさく度
千代種蒔き住あとまそのそ庭人心やこに遊ふ鎌下
かしこる園の中花のやこるるく涼るさしふき恵や
古行世のためしるふも京にふ絡ぬ恵そ狩も仰る

○

世々よりしも妙なる中絡るもなをちしくいつる日の新
朝露のまれ中ほくにまみ川実しまきる海免あり生
免ぐこけしふの舟路の海てそ中まきるる生さるん
めるみしれ利く面なる系ふ時海を実のいるくまれ面る富士の抓
行ものも都の人よかるる殿や免ぐこ物ある系ふのたのしき

實堅

免つどき今りのまみぐの新あやび都のほとにかるほくも
都るいくこそそそん角田川かる海考免しのありやあるしやく

川のほとりに入るの孤ども

蒼龍口畔雨餘秋　風冷雲開宜上舟
錦幄加裝煇四席　芳厨拜賜下中流
晴波影映麒麟動　美釀光搖琥珀浮
非類　大城恩待遇　何緣得作勝遊

舟よりなどとて小船もきはもてうちあるを網のめつらしけなる

花園窯場放歩行
盆栽器皿從心欲

人倉内直告息宏
崑玉桂枝盈載情

いくもぶのきみの色をしめもあやまつ　免くらう家の数
酒あるく物はもも沽ぬ　所伐きてのふるをいつをを沽かしらや
うはし絵の墨のくまとうをに　におしふぬ筆のちらをやうを

野寺叢祠迂路過
雲端偶爾望蓮嶽

江村風象自沖和
雨務外何邊認能波

梅宅織秋々草媚
行遊雖樂帰程遠

栽場蔭古々松多
遺興賞心便下坡

二九黄鼎唱櫂歌
長流数里舟行穏

太平音調是雍和
五園曲中客興過

去年演苑感恩優
昭代由来多徴事

今歳隅川復雅遊
一身清福仰時休

正二位藤原資愛 拝上

天保十四年菊月のとゝの乃日押宮よりおろをもうらく吹上の御園よ
りまゐで給ひの日き嶮よりをあきあく志のく免の比門あま幸橋のさとう
まてのおを作りて

あつの月墨ふめをゝ仰まはく

りふのさちをも思ひこそやを

辰の刻ちう大城の虎ゑ口を参ゝ松の殿ゑ着く大君一位乃君
ゆの外うゝゝよたゝ免まゝゝせぬ加持の作法し戒をもさゆ幸なりて

常盤ある加乃御殿ゑ君ゝう

子年をいのるゝ焼う生しさ

是れ食膳若干し義をしたるゆまうけ終りて後吹上の園を読ひ
終ふ朝とより所へおきてし終ひて右君に献ずる歌
終ふもいと来て三れ口より文門脚うゆみ門ゆ屋て西も手稿山吹
のなかもとそひ中門より花だんの亭へいてぬ折しも菊を
いまゝ初とゆびやうび外の花どもいこれをめゝがゆいなきよりしのたる
もせしふ

大ゆゝ御さき喝をもぬとも多ふ者ハ

君ゝ御乃花をめぐゆし

吹上の所ハおよそ言ふ一丈だかう吹上げ毎ゆ遠くよりハ煙ゝ雰ゝ
おゆめゝを立ようてゝ見れバいと細く吹めくことまうふちりこだゝく
さま更に似ゝるものおもしろ毎ゝ絵ゝ書ゆめて宝珠八功
德乃湧あゆ水さまともいひ難し亭ふ登りて左ハ泳ほく

六月ゝ雲ゝ見ゝく秋九の

吹上たてる乃ちゝ毎

滝ゝの亭ゝ毎ゝに西ゆ乃ハ毎ゝ

多ゆらしふゆゝまふ乃ゝ一首ゝ本ゝ終ひ乃ハとうゝ

蓬萊ハ毎ゝ白玉ゝ

君ゝ八千代ゝゝゝせゝふまし

庵園のさしもくこと葉まも草まも及びがたしおりしも降る雨
あかつき惜しなる霧たちこめたる深山のさまもことゝふじ茶花
洲まゝうの八橋をまなびく古きその語の心は遠りあしたる得もいひ
ぐゝし萩の花尾花あぐこそぐれらくゝ家ふくゝえふれば
うれしくを時もむまうまる神ゐふや
尾花がまえまあゝ塚さくゝ家

無亭より清音堂とゝる扁額をかゝふれたり

清音玉振晩秋天
奏氣襲人衣袂濕

百卉成叢錦繡妍
便知白練是飛泉

雨ふやこぬゝ立ゐ絞ひくゝ鳥籠どもおふるか所をゝ絞ふ丹頂鶴
孔雀 白鷺 鴛鴦 ぐうまゝ列あ和びたるいと先ぼぶくゝ見真まるわぎ
一むゝさ先のまゝ路うゝ塚より供乃女房たちうやゝ乃しめを合君も
ぬれ乃ぶち絞ひちぐふ滝見の亭まて雨やどりせんとゝもちひ絞ひ
再び清音堂よたちいり給精姫君もやゝ〳〵おもして共に雨中の氣
色に立ゝ出ゝ絞ひうるいとめづらしもくこぶなうしやゝて雨もやゝ
ぬれ乃例の八橋を渡り奥賊天乃社よまうでそこの裏地うゝをとばり
ゐけば地のこしらへうこの地ハ漱戸ものゝ泥土なるうまれより生なる
がこゝしかゝて常よ無らんんにゝ居ていづちくも得飛びちう給

がけうれるよしのまし真しまふこゝハ滝のあにそのしたるいづまや
まて四迫ハ清流石をはくしし墓ハいう半涼しふうんとゆうしくわもひ
やふ添無不ふう下を又あ流を事しきいたんうなし

岩はくうひなりくあれ音をみく墓を涼しまふしきあるまし

不二見の臺に登ま空うち景うてかの言狐ハ中ふしとをう祇し四方を又浸
しなるさま詞ものなくがあしゝ中のわをうに菩提樹あうこハ佛在世
この下ようて正覺を成せうしゝ霊木あうを道遂和尚實を得て
唐土より伽くゆふう建久元年のはこの國ゆ伝ゆまをしあういしう
めづらに貴仏をのあれバゆの実をもあひ得つ滝の宮飯詰の社まうで

きハの茶屋にをたゝしやをうふ無不ふ汚波の國をう奉るよしの
石橋あう高さ一尺ばかう長さ九ばかうあう幅ハ足人家うあ人ゆも
乃ぶ屋ゝ又白き青き色はしゝをて類ひ稀なるあう紅葉の亭に
いあうて志をゝしいこふ写ふ鉢うくの物二をくちも三をくちもあうべたうん
石ようにうたゝ世珍ひ行まてもてふ屋をきよゝ伝ゆうれうらあをを
たぐひいまくこひ賜うぬ扇のこゝうけうづまやあるどまて池の面を又浸す
にいゆく面ふゝ中流ある杉ふ帆のかゝまるさはものしたいたんうもかゝや

沖遠く見る心やゝて杉うけふ千姫の帆うげかゆ発でたまく

世れふう田舎めきたう不の牛部屋ふ作う牛のあふゝあるひるぶなる

ものどもうまうまをちらべ軒よりとうげをうげくものたてこやうの
うう物のたかうかくさまざまおりしき風情をうつしたり新田橋道や
いふまるべの立石を右に見ぬけてうくあるを見ぬけて名を桃家と名ぢけたる竹舎有
君もまうよりたがりいこうを竹ふこい茶屋の料のまうけあり
庭の立石ゆあ竹乃やうだひあどぐ実は田舎の名主が家ともいえ
はなぐしやぐく立あく馬見和をもぎく新茶やの卧竜観まてまいし
ゲわぐやまうひ竹ふ茶は菓子まうこう人くまも湯ぬ前に細き流
あり四方廣くうん渡さん花石竜石ひまうく立ちぶびかるえもいたび
卧龍観上辱陪遊

氷樹千層繞屋幽

沐得瀼々恩露洽

今朝更重紫雲裘

此日着紫裘袋　先皇之賜也

世ふう三角先来の物見は誘ふは櫻田見付彦根の邸ちど目の下に
みゆ堅遠鏡まうくうたうに海山のさ海面もうく訪ものしうれしきて
また中道を借ひ田舎屯畏はそのしたる一郷はいうれい誠まむるび
ある職の住居のさ海あやぐいと真あり道の狂いもあうぐしの物おろく
生あるをはませをくりどうもさせて絡ぬさのうたうう稲荷の社
道の狂十八町ばかりあるをやうくにううはきくぬぼく法華おやくしく
世この物うう見あせい麹町のうく明石の邸ちど眼下はうう対馬

場をはなれて梅林の蘭のほとりに田舎家一つありて四方は草花色々植ゑたり
其亭に香風散人の書たる雪月窓といへる額のかゝりけれど
わく／＼の花も蘭生に咲ほこりて名さへかんばしく月雪の窓
蘭の園にいたれば珠数草手折などして裏道より広しき詠めなど
いふ所にいたるて見れば気色見えもいはで夕月の松の間に不二のみえきたる芝
いくむらしくちく生茂りてそゞろにいとゞ由緒らかなるとりぐしにおかし

松間明月影逾幽　一望漫々草樹秋
虫意能知残意　吟声和露更啾々

まてしばしきらんやうあたりも広芝の露ふようにはらふ夕月の影

芝生の露をはらひ君も臣も衣の裾をかゝげ打連立ちふゞくしたびに紅葉の亭に
至りなにくれとなくかたらひしまゝけしき詠めふらん尽き御心もあらびなることや
又探幽が筆の中は観音左右は文殊普賢にて隠元が賛せし三幅対の掛
そのやあるぐ宝のそのよそにてたまらせるかゝりけるあまいかんともなしや
目も入るまでぬればかしもしみかゝまふう声ぞきこえしなる目もあやなりいふぞ
笛をふきならしつゝまたさかまく盤渉調に音とりて
子ろ秋もふかふの恵みは手に迷しやきこえ給ひけれる笛竹の色
志だしかまていと面白きしよしきこえまいらせ君に伴ひつゝ棒の端
花たむの亭なども白く見ゆの殿とよろしくまつは茂の時だかりしやさて

こゝまでもくるしくのその時うとくしついとはまして芝蘭餞まうゐる
比ハ支の時もるめぐ〳〵吉年ハ無月明る濱の御花まゐらこえうし今年
ハ冬吹上の不のふまゝで真せしも君の屋き御心しらひとうたゞげき
姉しき毎もゆるもはくみなどうく筆まるもの〳〵をしかぐ〳〵いよ〳〵まるし
後の世ともためしうらぐきこゝろぐとおもはえびちむ
年毎ふ深きく兄ぐうをくうくく
たゞしとぐあるふ年久乃さうぢき

二品尊超法親王